

# News Letter

## その瞬間

モマ、オカヅキ、ノブスマ、バンドリ、バンドリムジナ、ソバオシキ、モモンガ。いったい何の名前だと思いますか。実はこれ、すべてムササビの別名なのです。

ムササビは本州、四国、九州の森林に生息する夜行性のリスの仲間で、グライダーのように空を飛ぶことで知られています。大木の幹にあいた洞に棲み、移動は樹から樹への滑空、樹々の葉・花・実を食べるなど森と密接な関係を持った動物です。山里などでは普通にその姿を見ることが出来たため、各地で様々な呼び名がつけられたようですが、その可愛らしい姿とはうらはらに、しばしば森に棲む妖怪と同義語でもありました。ムササビは神社などの鎮守の森に高密度で生息する場合があります。洞ができるような大木が数多く残されていること、低木が刈り払われているため滑空が容易であること、多様な樹木が植えられているため食料に困らないことなどが理由として考えられますが、グルルルーと奇妙な声で鳴き、闇夜を飛び回る動物が鎮守の森にたくさん棲んでいるわけですから、子どもなどは得体の知れない妖怪が出るというイメージを持ったようです。

最近まで私の家の近く(埼玉県入間市)の鎮守の森でもムササビの姿を見ることが



ムササビ (写真提供・長沢淳)

が出来ました。地区の神様を奉ったごく普通の神社でしたが、隣接する民家の屋敷林に巣があり、夜になると数頭のムササビが神社を経由して近くの丘陵の林まで採餌に出かけていました。何年か観察しているうちに、ここに棲んでいるのは雌とその子どもで、雄は交尾期だけ集まってくることなどが分かりました。飛んできたムササビと衝突しそうなことや、フクロウの追跡を必死で逃れようとしている子ムササビに出会ったことなどもあります。

ところがあるとき、近くで霊園の造成が始まり、屋敷林と神社をつないでいた林が跡形もなく伐採されてしまうという出来事がおこりました。移動に必要な樹がなくなってしまったのですから、ムササビは屋敷林から出られないはずですが、するとムササビたちは、滑

空で届かない部分を危険を冒して走り始めたのです。硬いコンクリートの地面に着地し、素早くはない動作で神社へ向かって走る姿は痛ましくもありました。特に、子ムササビは滑空距離も短く、その分長く走らなければなりません。当時、高校生だった私と友人たちは霊園業者に植樹をお願いしたり、地元の人々の協力で近くに生木を立てたりしてみたのですが、残念ながら半年ほどするとムササビはいなくなってしまうました。

かつてその地域に身近にいた生き物が、身近でなくなる瞬間というものがあります。その瞬間、瞬間に気づくというのはなかなか困難なことではあります。しかし、気づいたらもういなかったということの繰り返しはそろそろ終わりに出来ないものでしょうか。

(本社自然環境調査室・重昆達也)